

02

第2の旅

よもつひらさかは黄泉の国への入り口！

■ 1 因幡の白兎で、大国主命のデビュー

■ 2-1 因幡の白兎 大きな袋を肩にかけた大国主命に助けられる。

出雲大社の遷宮に合わせて出雲に参拝するつもりだったが、ヒコーキはすべて予約でいっぱいだった。しかたなく隣の米子の「鬼太郎空港」の便を予約した。東京から見れば「出雲縁結び」空港も米子「鬼太郎」空港も大した違いはない。空港からレンタカーで、出雲大社へ直行のつもりだった。しかしヒコーキ内で見た雑誌に、出雲大社内に大国主命と白兎の像があった。「そうだ、大国主命是因幡から来たんだ！」と思い、大国主命デビューの地を見に行くことにした。

目的地は「因幡」の「白兎神社」、米子空港は伯耆の国にある。右手に大山(だいせん)、左手に美保岬を見ながら海岸線を進んで、因幡の国に入る。伯耆も因幡もいまの鳥取県だ。県知事が「スタバはないけどスナバ(鳥取砂丘)はある」との名言をはいていたが、大昔は日本海側が日本国の中心で、強大な国々があった。その頃の我が東京は武蔵の国のほんの一部。東京駅、銀座、お台場など海の底だった。

大国主命は当時の先進地域の山陰海岸の因幡、伯耆に上陸し、地元の姫様をめぐって国づくりを始めた。ワニとウサギが砂丘でじゃれ合っていたわけではなく、多くの国々が割拠して、美しい姫様を得ようと争っていた場所だった。

白兎神社は車でも案外遠かったが、いい神社だ。観光用神社かと思っていたが、由緒正しい神社だ。たぶんこの辺りが大国主命上陸の地と言い伝えられていたのだろう。

◆ 因幡の白兎のお話し

のちに出雲の神さまになる大穴牟遲(おおなむち)神は、いじわるな兄神たちに大きな荷物を持たされ、因幡の海岸を歩いていた。荷物が重たいので兄たちに遅れてや



つと気多(けた)の岬につくとそこには皮をむかれたウサギが泣いていた。

大穴牟遲が「どうしたのか」と尋ねると、そのウサギは隠岐の島に住んでいたが、海を渡って因幡の国に来たかったので、ワニを呼び出し、一列に並べて、「数を数えてやる」と言ってだまして、その背中を飛んで因幡の海岸にわたろうとした。もう少しで陸地に着くときに、「やーい だまされた！海を渡りたいので、お前らを並ばせただけだ」と言ってしまった。最後に並んでいたワニがウサギを捕まえて、怒りにまかせて白ウサギの皮を剥いだのだ。

先に通りがかった大穴牟遲の兄神にその話をする、
「海水に肌を浸して、太陽にあたると治る」
と教えられた。その通りにするとこんなに肌が赤くなって痛みが増した、と泣いた。
いじわるな兄たちと違って、大穴牟遲は優しく、
「真水に肌を浸して、蒲の穂に包まっていれば治る」
と言った。ウサギがその通りにすると元通りの白ウサギに戻った。
喜んだウサギは大大穴牟遲に、
「兄神たちは因幡の八上比米(ヤガミヒメ)と結婚しようとしています、だれも無理でしょう。因幡の八上比米と結婚するのはあなた、大穴牟遲です」
と告げた。そして大穴牟遲は八上比米と結婚した。大国主命の最初の奥さんである。

【寄り道ばなし】

ある本に、「ワニ」は日本にはいないので、これは「フカ」のことである。山陰地方では「フカ」のことを「ワニ」と呼ぶ、と書いてある。別の本にはフカの背中よりワニの方が広いので、ウサギが飛びはねることができる。当時はワニも海にも住んでいた。などの説が紹介されている。「まさか！」と思うが、むかしは因幡の白兔神話を史実として論じていたのだ。

ワニは「和邇」族、兎はたぶん「宇佐」族のことを婉曲に伝えているのであって、いまはワニの背中をウサギが渡ったなど考えている人はいない。和邇族も宇佐族も海洋系の渡来民族で、彼らの力を借りて大国主命が日本国を作ったことを神話にしたものだ。彼ら海洋民族は、南方から日本列島に海洋文化を持って入ってきた。現在も「和邇」は奈良の近くに、宇佐は九州に地名が残っており、古代豪族にもその名がある。【おわり】

ウサギの予言どおり、大穴牟遲は八上比米と結婚する。ふられた兄神たちは怒って、大穴牟遲をめっちゃめっちゃにいじめる。大穴牟遲はついには黄泉津比良坂(よもつひらさか)の先の黄泉の国に追いやられた。すなわち殺されてしまった。

因幡の白兔の話は、「めでたしめでたし」ではなく、最後はいじめ殺される悲劇なのだ。



■2-2 あっという間に大穴牟遲は黄泉の国へ

黄泉(よみ)の国というのは死者の国のこと。大穴牟遲命は亡くなりました。……終わり！ではお話はおもしろくない。実は大穴牟遲命は「黄泉返る」のだ！。黄泉の国から帰って来ることを「よみがえる！」という。

黄泉の国は「根の堅州の国」とも言われ、今の島根県にあると聞いてはいた。黄泉の国に行くには黄泉津比良坂(よもつひらさか)を下っていく。今回出雲に行くので、ぜひその坂の上まで行ってみたいと思った。若い頃はそんなところを訪れて、つまづいて坂道を転がり落ちたら大変なので訪れることなど考えもしなかった。

しかし最近「黄泉津比良坂」は、パワースポットとして大人気の場所になっていると聞いた。松江から JR 山陰本線で三つめの揖屋(いや)駅で降りて旧山陰道を安来の方に少し歩き、揖屋神社の先の山陰線のガードをくぐった谷戸の奥にある。

私が訪れた時、上の方から大挙して若い女性の声の下りてきた。黄泉津比良道で大勢の女性の声を聞くとは思わなかった。

「なにかあったのですか？」と聞くと

「出雲のパワースポットをめぐるツアーです」という。

出雲には多くのパワースポットがあるが、黄泉津比良坂のパワーは出雲大社の発するパワーよりも強いそうだ。

「瞬」という北川景子さん主演の映画の撮影地で、おどろおどろしいポスターが貼ってあったが、若い女性たちは団体で明るくはしゃいでいる。私のイメージした死者の霊に取り付かれそうな場所ではなかった。でも雨が降る夜、一人で訪れたら、やはり何かを感じられるかもしれない。



◆先ほどの話に戻る。

兄たちの意に反して八上比米と結婚した大穴牟遲は、兄たちにいじめ殺され、黄泉津比良坂を下って黄泉の国に到着する。黄泉の国にはなぜだか「スサノオ」がおり、大穴牟遲を見て、「この男は葦原醜男だ」といい、無理難題をいいつけ、いじめを繰り返す。

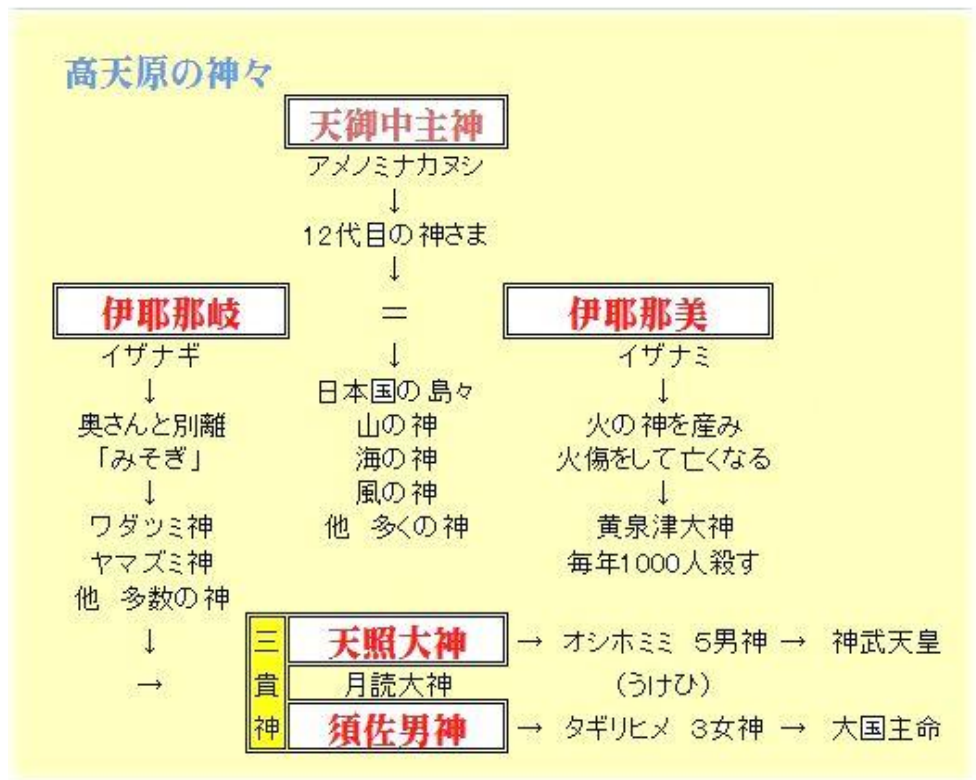
しかしそのたびにスサノオの娘であるスセリヒメが助けてくれる。

話はまた複雑になる。
スサノオ(須佐男神)は高天原に住む神さまで、日本国土を生みだしたイザナギ・イザナミ夫妻の子どもで、三貴神の一柱だ。

神さまは一柱二柱と数える。姉は天照大神と月読大神(ツクヨミ)。

天照大神は明を象徴する太陽神、月読大神は闇の象徴だと思う。ツクヨミの「ヨ

ミ」は闇とか黄泉とかに通じる。しかし「古事記」に月読大神はほとんど出てこない。



スサノオは高天原での素行が悪く、父のイザナギによって高天原を追放される。大穴牟遲が亡くなって「黄泉の国」に行った時には、スサノオは母親のイザナミの住む黄泉の国に滞在していたのだ。

黄泉の国に落ちても大穴牟遲はスサノオによって、めっちゃめっちゃいじめられるが、スサノオの娘のスセリヒメに助けられて、ふたたび黄泉津比良坂を越えて逃げる事ができた。いわゆる「よみがえり」である。

黄泉津比良坂まで追ってきたスサノオは
「おまえは立派な奴だ、この後、スセリヒメを妻として大国主となれ！」
と結婚をみとめ、はなむけをしてくれた。

大穴牟遲は亡くなって黄泉の国に行った。しかし名前を大国主と名前を変えて黄泉がえった。スセリヒメは、大国主の最初の妻となった。大穴牟遲の妻であったヤガミヒメは、スセリヒメの嫉妬に嫌気がさして、子どもをおいて因幡に帰国してしまった。

黄泉の国での試練に耐えて、再びよみがえった大国主命。世界の偉大な神さまやキリストさまの復活劇と同じテーマである。

<右は天の沼矛(ぬぼこ)で混沌をかき回して、大八島を生みだしているイザナギ、イザナミご夫婦神である。二柱は高天原から出て「天の浮橋」の上に立っている>



■2-3 イザナギ、イザナミのご夫婦神のケンカ別れの太岩に触ってしまった

◆古事記について

「因幡の白兎」やあとに出てくるスサノオの「八岐大蛇退治」さらに「海の中の竜宮城」、「三本脚の鳥」など、皆よく知っている話だが、これらはみな古事記にのっている。日本のサッカー協会の旗はこの「三本脚の鳥」に由来する。

この書は天武天皇のころ稗田阿礼が覚えていた伝承を太安万侶が書き表したもので、日本で初めての歴史書とされた。世界に向けた公式の歴史書である「日本書紀」の日本人向けの普及版みたいなものだ。

日本書紀は漢文で書かれているが、古事記は日本語に漢字の音(おん)をあてて書いてある。…らしい。もちろん私が読めるはずもないので、この後に古事記と記するのは梅原猛さん翻訳の「古事記」のことである。梅原猛さんと言えば、古事記の作者は柿本人麻呂、編者は藤原不比等と、かなり変わった説を出す人だから、梅原古事記は本来よりもちよと変わっているかもしれない。しかしなんといってもおもしろいので、私はこの文庫本を携えて、出雲、大和、伊勢をまわっている。

ところで「古事記」の神話の部分には具体的な地名はあまり出てこない。しかし黄泉津比良坂(よもつひらさか)は当時の伊賦夜(いふや)坂だったとわざわざ注釈がついている。現在伊賦夜坂という地名はみあたらないが、さきほど通過した「揖屋」神社がなにかを知っているのではないかと見当をつける。神社にもどると「伊賦夜は揖屋だった」と案内板には書いてあった。社殿の周りを歩きながら、「いふや」を繰り返し発音すると「いや」(揖屋)と聞こえるようになる。歩きながら考えるのはなかなか効果がある。

揖屋神社だが、祀られている祭神はイザナミ、大穴牟遲、少彦名、事代主の4柱だ。メインの神さまはイザナミ。大穴牟遲はのちの大国主、少彦名は大国主と一緒に出雲

を作った神さま、事代主は大国主の息子で、一緒に出雲を作った。イザナミ以外は大国主グループと言っていい。

揖屋神社のお社は太社造りで、立派な千木がそびえている。鯉木は3本、千木は内削ぎだから、女神を祀っている。(イザナミ女神)

手前の小さな社は大国主命の奥さんの三穗津姫社。反対側に韓国の神さま(イタテノカミ)の社がある。



揖屋神社がある東出雲・意宇(おう)あたりは古くは出雲の国庁もあり、古い神社が多く集まっている。それら神社のご祭神は当然出雲の神さま大国主命と思うが、そうではない。揖屋神社は系統の違うイザナミ女神がメインになっている。ここがイザナミの居る黄泉の国の入り口だからに違いない。

ところで、中央のイザナミの神殿の両脇には相殿がある。向かって右はのちの大国主命の奥さんである三穗津姫社、左手は韓国のイタテの神さまが祭られている。しかしなぜここに朝鮮半島の神さまがおられるのか。出雲地方と朝鮮半島は親しい関係にあったことを示しているのだろう。

◆ 話を進める前に、ちょっと待って！

この黄泉津比良坂は、大国主命の再生の前の時代、イザナギとイザナミ夫婦がけんか別れた場所としても古事記にはでてくる重要な結界でもある。

イザナミ女神は火の神を生んだ後やけどして亡くなり、黄泉の国に行く。その時スサノオは生まれていないが、大国主命の再生の話では母イザナミを追って黄泉の国に来ていた。古事記にはこんな前後不明の話はいくつもある。神話だからしょうがない？

夫のイザナギは黄泉の国に行って、
「まだ国生みは終わっていないので、戻ってきて一緒にやりましょう」と言う。

イザナミは

「それじゃ黄泉の国の王さまに聞いてみるので、待ってて！」という。

「あれっ！ 黄泉の国には王さまがいるの？ それは誰だろう？」

私は天照大神の妹で、先ほど述べた月読大神だと思っている。太陽の「明」に対して月は「闇」で象徴される。闇＝黄泉＝夜見＝読み でも月読大神はイザナギの娘だから親子関係が逆になる。神話だから前後は無視してもいいかな。

夫イザナギは妻のイザナミを待つ間に、ついのだき見をして奥さんの本当の姿を見してしまう。すでに体にはウジがわき、腐り始めていた。それに気づいた奥さんは
「見たな～あ！」と言って怒り狂う。

驚いた夫のイザナギは急いで逃げ出すが、イザナミの侍女たち(醜女しこめ)が追い掛けてくる。夫は山ブドウや桃を投げ、侍女たちがそれを食べているすきに坂の下に逃げ帰り、そこに大きな岩を置いて黄泉津比良坂を閉ざした。先ほど示した写真の大岩である。その大岩を挟んでイザナギは奥さんに

「お前と離婚する」と宣言する。

「あなたがそんなことをするならあなたの国の人を毎日千人殺す」と元妻が言う。

「それなら、私は毎日千五百人の産屋を建てる」と元夫が言って、決別した。

これ以降、日本国では多くの人が亡くなるが、それ以上の数の子が生まれ、どんどん人口が増えてきた。

◆イザナギのみそぎ

夫のイザナギは、

「穢れた国に行ったので、体が汚れてしまった」

と言って、筑紫の阿波岐原(あわぎはら)の海で穢れを落とすミソギをする。

イザナギは男神だが、神さまだから子どもを産むことができる。

左眼を洗ったときに天照大神が生まれ、

右目を洗ったときに月読大神、

鼻を洗ったときスサノオ神が産まれる。

その「三貴神」は夫イザナギから生れたのであって、スサノオの母は奥さんのイザナミではない。しかしこのあたりの話は前後まったく脈絡はない。

左のポスターは、宮崎県のシーガイアの近くの「阿波岐原」にあった。古事記には



「筑紫の阿波岐原」とあるので、私は北九州だと思っているのだが、宮崎県日向が名のりをあげている。とりあえずは、宮崎県説に与しておく。

ミソギをした池は昔は入り江だったろうが、体を洗うとかえって汚れそうな場所だった。上の絵の真ん中のあごひげの神はイザナギ、左で歯をむき出しているのが父に追放されたスサノオ、小さいのが月読神(ここでは男神だな)、真ん中の前の姫様が天照大神だ。この付近でのポスター類をみると、この女性をヒミコと見立てている。……日向:宮崎神宮のあたりでの感じ。

ところで、前に示した黄泉津比良坂にある大岩、私はつつい触ってしまった。後で知ったが、あれがイザナミ女神とイザナギ男神とがケンカして別れを決めた場所なのだ。最近わが家では夫婦の意見はことごとく食い違い、すれ違ってばかりいる。どうもあの大岩に触ったのが原因ではなかろうかと疑っている。パワーというのは、マイナスパワーとプラスパワーがあって、マイナスの気をもらうと、不調になると言う。あのツアアの女の子たちは大丈夫だったろうか。パワースポットと言うが、パワーはもらえばいいというものではない。私の経験から言えばマイナスパワーは避けるよう人をした方がいいかな。

■2-4 綱引きを終えて、意宇(おう)と叫んだ。

翌日は雨だったが、奥さまの足も快調で、東出雲の意宇(おう)の地域をまわった。泊まった松江からはバスで「風土記の丘」に行く。昨日から東出雲の地域が本来の出雲だという話を聞いたからだ。

意宇(おう)は島根県の最大の郡だったが、いまは松江市、安来市などになっている。なんか意味ありげな名前だが、伝説では八束水臣野命(ヤツカミズオミツノミコト)が国引きを終えた時に、意宇(おう)と言ったことから出たという。現在の「おう！」ではなく、「終えた」というような意味だったようだ。

国引きは4回行われたそうで、最初は三瓶山を杭にして朝鮮から日御崎の土地を引っ張ってきた。そして最後は大山を杭にして、夜見が浜を綱に見立てて、能登から土地を美保岬に引っ張ってきたというお話だ。米子の空港がある夜見が浜はきれいなカーブを描く長い砂浜が連なっているのが、伯耆の名山「大山」(だいせん)の上から見るとわかるそうだ。残念ながら私はまだ登ったことがない。次回には必ず登ろうと思う。高みに立てば壮大な気分になること請け合い。の神さまもハイな気分で、大山に足をかけて、「よいしょ」とひっぱった。「やったぜ！おう！」という感じだったろう。

その意宇(おう)盆地には出雲国庁、国分寺など主要な官庁が集まっていた。風土記の丘の中にも古墳があるが、盆地内の田畑の間のそこそこに丸い丘がある。それらは古墳だ。雨の中歩いてみたが、まるで奈良の大和盆地にいるような気分だった。

■ 神魂神社は最も古い大社造り 国宝だ！

風土記の丘で一応このあたりの歴史を勉強して、すぐ近くにある「神魂神社」(かもす)に参った。現存する最古の大社造りの社殿(国宝)を持つ神社だ。雨にぬれた参道は風情があっていい。傾斜のゆるい女坂もあったが、急な石段の男坂をのぼる。石段の上に立派な拝殿がある。どこも同じだが拝殿前からは本殿は見えない。

出雲大社は囲いが高いので、本殿は少ししか見えないが、ここは横に回って本殿を望むことができる。大きさは出雲大社にはおよばないが、形は同じで、すっくと立っている。

ただし千木は内削ぎで女神様を祭っていることが分かる。



神魂神社の祭神も、揖屋神社と同じでスサノオが母としたウザナミ女神だ。スサノオと天照大神の姉弟のさらに一代前の神様である。念を押すようだが、スサノオはウザナミを母と慕うが、ウザナミの夫であるウザナギが黄泉の国から戻ってみそぎをした時、左目から生まれたのが天照大神、鼻を洗ったときにスサノオが生まれる。

深く追求はしないが、古事記ではウザナミの子ではない。まあ元夫婦の子だから、お母さんと呼んでもいいのだが。なにか深い意味があるのか、単に二つの神話を継ぎ足しただけなのか、疑問が次々に出るので旅は楽しくなる。

神魂神社の始まりは、出雲国造が守護神としてウザナミを祀ったことに始まる。出雲国造は 25 代までが神魂神社の祭主を勤めていたが、西 65km に杵築(出雲)大社が創建されると、国造家も大社に移住した。国造制度は大化の改新で廃止されたが、出雲、紀伊など一部は存続した。しかし現在まで存続しているのは出雲だけだ。

2014 年 10 月に第 84 代の出雲国造の長男である千家(せんげ)国麿氏が高円宮家の次女典子さんと結婚された。まだ出雲国造家は続いているのだ。2000 年も前から続く両家の方々が歴史をまたいで結婚されるというのは、我々どこの馬の骨か分からない家に生まれた人間にとっては驚きだ。

ところで、出雲国造が神魂神社から杵築神社に移ったが「神火相続式」「古伝新嘗祭」の時には神魂神社に国造さまが参向するそうだ。由緒ある神社だが「出雲風土記」にも「延喜式」にも出てこない不思議な神社だという。

ところでこの神社はウザナミ女神を祭っているが、宮司さん自身も女性である。お話を伺おうとしたが、今は出雲大社の遷宮祭で、どの神社の宮司さんたちもみな出雲大社にお出かけになるそうだ。

ちょっと不思議なことだが、揖屋神社も神魂神社も古く由緒ある神社なのに、出雲の神さまではないウザナミ女神が主祭神だ。出雲の神さまといわれる大国主でも大物主でもないというのは何か意味があるのだろうか。

大和の三輪神社参った時に、三輪山の神さまは出雲の神さまだと聞いたので、こちらにやってきたが、これまでに参った神社には大国主命も大物主命もいなかった。古い出雲の神社は大社造りだが祭神はウザナミ女神で高天原系である。さらに亡くなった後は黄泉の国に行ってしまったのだから、この神さまを祀るというのはあまり解せないのだが……

大国主命さん、大物主命さんは、どこへ行ったのだろうか？

■2-5 八岐大蛇(やまたのおろち)を退治したのはスサノオの神

イザナギ男神に追放されたはずのスサノオは高天原にしばらく居座って、姉の天照大神と「うけひ」という占いで争った。本人は勝ったつもりで調子にのり、高天原で乱暴狼藉を働いた。怒った天照大神は岩屋の中に隠れてしまった。太陽の神がいなくなったので世の中は真っ暗になった。困った神さまたちはいろいろ画策した。岩屋の前でアメノウズメが裸踊りをした。神々のはやんややんや声をあげて囃したてた。これが「神楽」の起源という。

あまりに賑やかなので不審に思った天照大神は岩屋の戸からちょっと顔を出した。強力のだじカラオが岩戸をこじ開けて、放り投げたので、天照大神は再び姿を現し、世の中は明るさを取り戻した。高天原の騒動の原因を造ったスサノオは財産を没収され、髪を切られ、爪をぬかれて、高天原を追放された。

高天原を追い払われたスサノオは朝鮮半島にくんだり、さらに出雲の簸川の鳥髪山に移動した。この場所は鳥取県との境の船通山のふもと、JR木次線の出雲横田付近だろう。ここには鳥上とか、大呂(オロチと似ている)という地名が現在も残っている。

大国主命も因幡、伯耆の海岸から出雲に来るが、スサノオも高天原からいったん朝鮮半島に下り、そこから海を越え因幡から伯耆をとおって来たに違いない。

鳥取、島根の県境の船通山というのはきっとスサノオの乗ってきた天の岩船が通った道に違いないと考え、「峠越え」で有名な賀曽利さんに聞いてみたが、「あの県境に船が越えられる峠はありません」とのお言葉。

私の推量は根拠なし。スサノオはある日突然簸川に降りてきたことにしよう。

【八岐大蛇の話】

スサノオは簸川のほとりで嘆き悲しむアシナズチ、テナズチという老夫婦に出会う。

娘のイナダヒメが八岐大蛇(ヤマタノオロチ)の人身御供になるのを嘆いていたのだ。

スサノオはアシナズチ、テナズチに、強い酒を用意させてヤマタノオロチを待った。オロチは若い娘よりも先に酒に気付き、ついそっちに気が向いた。八つの頭を酒桶に突っ込んでがぶ

飲みして酔っ払ってしまった。

スサノオはすかさず十握の剣



＜上の写真は石見神楽のポスターから！ 大蛇が酒を飲みのたうっている。スサノオは十握の剣を振り上げている。しっぽから鉄剣が出てくる＞

(トツカノツルギ)でヤマタノオロチ(大蛇)をバラバラに切り刻んだ。切り刻んだ大蛇の尾からすばらしい「剣」が出てきた。

私の想像ではスサノオが持っていた十握の剣は「青銅器」の太刀だ。一方ヤマタノオロチは「鉄」の剣を持っていた。出雲の地は古くからたたら製鉄がおこなわれていた。当時斐伊川には赤い水が流れており、これはヤマタノオロチの血といわれる。が実は鉄を精錬する時の酸化鉄の赤い色だった。

青銅器の剣は鉄剣よりも柔らかい。だからスサノオは相手を酔っ払わせるという作戦を取らなければ「鉄剣」を持ったヤマタノオロチには勝てなかったのだろう。

新たな鉄の剣を手に入れたスサノオはこれを「ツムガリの太刀」と名付け、高天原の天照大神に奉納した。さらにその剣はヤマトタケルにわたり「草薙の剣」と呼ばれた。ヤマトタケルが残した太刀は現在も熱田神宮のご神体として祀られている。「草薙の剣」は天皇家の「三種の神器」のひとつで、日本国にとっては大変重要なものだが、ほんとうに熱田神宮にあるのか、だれも確かめていないそうだ。

スサノオは人身御供になりかかったイナダヒメを嫁にする。大杉の下にイナダヒメを隠して、ヤマタノオロチを退治する。その様子をイナダヒメは見ていたのだろう。すばらしくカッコいいスサノオさん！嫁になりたい！と言ったかどうか。ともかくこの地でスサノオとイナダヒメは結婚した。

◆八重垣神社

二人の結婚した場所は神魂神社に近い「八重垣神社」で、「縁結び」にあやかりたい人たちでにぎわっている。



私たちが行った時は大雨だったが、神社の奥のうっそうとした森にある「鏡の池」に占いの紙に 100 円硬貨を載せて浮かべている女性たちがいた。

商才のきく人が、良縁占いを思いついたのだろう。薄い半紙の中央に、小銭を乗せて池に浮かべると、お告げの文字が浮かぶ。早く沈めば、早く縁づくといわれる。だから軽い 1 円玉ではなく、重い 10 円か 100 円を使うとよい書いてある。

■ すがすがしい須我神社

スサノオはヤマタノオロチを退治し、イナダヒメと新居を持つためにいろいろ物件を探した。須賀という場所にきたところ

「ああ、私はここにやってきてやっと心がすがすがしくなった」と言った。

それからこの地を須賀と言う。そして次のような歌を作った。

「八雲立つ出雲八重垣妻込みに 八重垣造るその八重垣を」

これが日本で初めての和歌とされており、須我神社は「日本初の宮」といわれる。

ところで、この神社と先の八重垣神社とはどういう関係なのか、よくわからない。スサノオの「ああすがすがしい……」という言葉から、現在の雲南市須賀を須我神社としたのだが、古事記の記述には「すがすがしい……」だけしかないので、場所を特定するのは難しい。八重垣神社が本来の神社かもしれないし、安来市にある須賀神社がそうかもしれない。

またもや私の推測だが、「八雲立つ……」の歌は、ちょっと離れているが出雲市の「須佐(スサ)」神社の方が話はあうのではないかと思う。スサノオを祀る神社なので、須賀(スガ)あるいは須我とするのはちょっと不自然。さらに古事記にはイナダヒメの父アシナヅチに「この宮の長になれ！」と命令したとある。そうであればアシナヅチも祀っているはずだ。八重垣神社も、この須我神社もアシナヅチを祀っていない。

しかし出雲市の「須佐」神社はスサノオ、イナダヒメ、その両親アシナヅチ、テナヅチを配祀している。

そこで「須我」神社から急いで「須佐」神社に行こうと思ったが、須我神社の奥に「八雲山」があり、スサノオの磐座があるとの話を聞き、そこを先にすることにした。

なぜなら磐座(いわくら)は昔の人が「神のより代」と考えた場所で、古代には磐座をふもとの拝殿から拝むというのが神社だったからだ。私の好きな大和の大神神社は今でも三輪山の磐座が御神体で、ふもとには拝殿しかない。

磐座があるのは古い形式の神社だ。やはりこれがスサノオ夫婦の新居だったのか？ とにかく先に見て、その後に須佐に行くことにした。



ところが八雲山は神社から2キロ歩き、さらに400mも登らなければならない。

家に戻ってからネットを見ると、途中まで行ったが上りが大変だったので引き返したという記事がいくつかあった。我が家の奥さんは最近歳のせいでヨタヨタしているが、それでもなんとか登ることはできた。

なかなかいい磐座だったが、本殿のある須我神社からは遠すぎる。やはりこの磐座と須我神社は後の人がこじつけたものだろうと勝手に判断して山を降りた。

磐座自体は、先日歩いた熊野古道の大雲取越え道にある「円座石」に雰囲気似ていてなかなかよかった。

ところで、須佐、須我、素我 はいずれもスサノオを示すが、私は神話の後の時代の蘇我氏に通じるのではないかと考えている。ヤマトの三輪山に大物主神がおられたが、私は物部氏の神さまだろうと推測した。古代日本において聖徳太子一族を輩出する名門の蘇我氏もきつとどこかに祖先を置いたはずだが、出自はあまり明らかになっていない。しかし私はきっとスサノオに由来すると思っているのだが。

須我神社の磐座をみたら、熊野古道の難所を思い出した。須我神社に戻って地図を見ると、「須佐」神社までは遠い。熊野大社まではなんとか歩けそうなので熊野古道をらみで行き先変更。君子は豹変するのだ。

ところで、出雲には超巨大な出雲大社があるのに、なんでこの熊野大社が出雲の一宮なのか、またまた大きな疑問に突き当たった。



■2-6 熊野大社が出雲の一宮？

熊野大社の祭神は「いざなぎのひまなご」「くしみけぬのみこと」などの名があるが、それらはスサノオの別名。したがって熊野大社もイザナギ・スサノオ系列の神社である。現在では本家のように紀州の熊野三山は、出雲の神さまを勧請したものだ。

熊野大社と出雲大社の関係は、熊野大社の方が古く、新しく国を引っ張ってきた後の土地……日御碕付近は縄文時代は島だったが、海が退いた後斐伊川の土砂によって地続きになった……に現在の出雲大社を築き、熊野大社から神さまを移し、神魂神社から出雲国造が移住した。出雲大社という名前は明治になってからのもので江戸時代までは杵築大社だった。

熊野大社から全部引っ越したのでは熊野大社も面目が立たないので、一番大事な神事である鎮火祀りをつかさどる神さまは残した。神聖な「火」の発祥地でもある熊野大社は、別名「日本火出初社」といわれ、「鑽火祭」は、年ごとに火をきり出す重要な神事として引き継がれている。それを執り行う神職は毎年出雲大社から来るのだそうだ。

ところで、この神社の狛犬。逆立ちしている。何で逆立ちしているのかわからないが、出雲系の神社ではこのような姿が特徴になっている。しかし何でここ出雲の一宮である熊野大社にも大国主がいないのだろう。そのところもよくわからない。

出雲といっても広い。今日一日雨の中を東出雲の意宇(おう)という地方を中心にバスと歩きで巡った。出雲は大国主神が造った葦原中国だという先入観を持って歩きまわったのだが、黄泉津比良坂でちょっとだけその名が出てきただけで、どの神社にも出てこなかった。東出雲ではイザナミ女神とその子神(?)であるスサノオを主祭神として祀っている神社が多かった。大国主命さんはどこへ行ったのか、かなり不思議なことだ。

秘かにヒミコがいるかどうか
も気にしていたのだが、今日
歩いたあたりには、見えな
かった。

もう少し歩きまわらねば、出
雲というものが見えてこない。
本日は天気が悪かったことも
あり、時間的にも空間的にも
視界が悪い。出雲大社に行
けば視界が広がるかな。

